

1



写真 1

発情時の粘液について再考

釧路中部事業センター虹別家畜診療所 獣医師 石川行一

「明日へのかけはし」9月号で、道東3地区家畜人工授精技術研修大會のお話がありました。その中で釧路家畜人工授精師協会技術研究部会の「粘液性状による授精率と受胎率について」の発表があり、粘液性状は柔らかく、量は多いほうが授精率も受胎率もいいということでした。そもそも、発情の粘液とはどこから来るものなのでしょうか？ 実は膣と子宮の間にある頸管といふところから出てきます（図1）。

発情中だけではなく、それ以外の時期にも粘液はありますが、粘度が高く、硬い粘液になります。発情期の粘液は透明で水分を多く含み柔らかく牽糸性の高い（よく伸びる）といわれています（写真1）。筆者も大学では「陰部から飛節あたりまで垂れているものが多い。ローションのようになつていてるほうが雄の生殖器も入りやすい」と教わりました（今ならセクハラですかね？）。ただ、それだけではなく、粘液がこのよう

な状態になると、精子の受容性が良好となり、進入性、生存性も高まるといわれています（写真2）。発情発見の一つの目安として使われている組合員さんもいるとは思いますが、牛それぞれに個体差もありますし、農場単位で変わってくるということもあるようなので、次回からは手にとつてみてどのくらいのものが受胎率がいいものかチェックしてみるのも面白いかもしません。

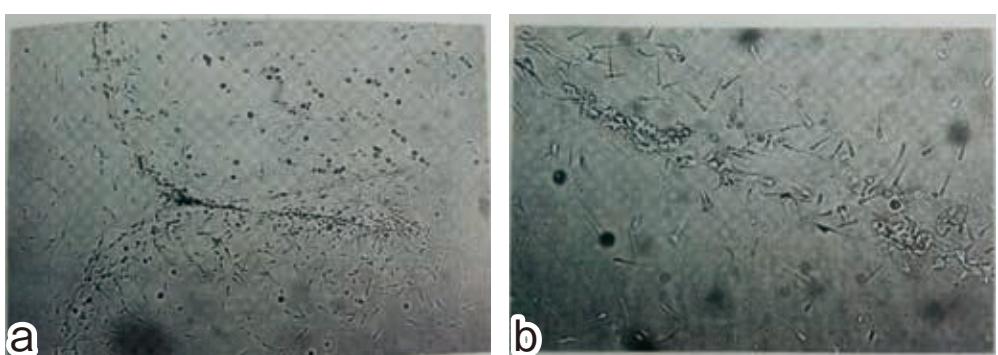


写真2：aが受容性あり、右側が粘液でスジのようなものが見えますが、粘液に向かって精子が向かっていきます。b受容性なし、下側が粘液だそうです